

「とてもフレキシブルよ、10時にきて遅く帰る人もいるし、早く来て、早く帰る人もいるし。わたしは後者にするわ。あと、そのときの仕事の状況にもよるわ。友達でそこではたらいっているのをきくと、2、3ヶ月はひまなときもあって、5時には帰れるっていうし。でも忙しいときには、チームワークだから、残ったりもするみたい。」(Oさん)

Oさんの言葉から、法律関係の仕事でも、これまでの女性が一時的に仕事を中断してきたことが多かったが、彼女のようにこれから働きに出る女性は、少なくとも現段階では、選択があると思っていることがわかる。また、彼女の「実際になったら、わからない」という言葉にも現実味があるが、その場合でも、1世代前の女性たちもそうであったように、問題なく復帰でき、40代、50代になっても、職場や働く領域を変える考えをもっていられる状況であると考えられる。ある程度先の保障されている状況では、中断する決断も、合理的な選択肢の1つになるのであろう。

今回話した女性たちは、家庭と仕事を男女で平等に分担している状況からは程遠く、女性が仕事を中断したり、パートタイムに変更したりしているが、それによって、再就職が全く不可能になったりしているほどのダメージはなかったようである。

(2) 子どものいる生活

ここでは、子どものいる生活の実態について、どう語っているかをみってみる。

Dさんは、一人目の子どもが病気を持って生まれたこともあり、大変だった様子を語る。彼女の言葉は、まさに子育ての大変な部分を表現しているといえよう。これは、ニュージーランドに特有のものではなく、先進諸国ではかなり一般的であると思われる。

「お父さん、お母さん、プラス赤ちゃんで幸せな家庭、なんていうイメージがあるけれど、そんなのは実際には全くありませんでした。結婚関係にとって、大変なことでした。一人目が病気だったし、夫は長時間働いていたし、家族はそばにいないし、借りていた家はとても狭かったし。そして子どもは、とても非協力的だったの。」

一人目のときには、生活がまっさかさまになるって感じです。自分の時間にどうするかなんて選ぶ余地もなくなるし、夜はよく眠れないし、本当に、なんていうものを産んでしまったかと思いましたよ。でも、二人目ができるころには、もうなれていて、何が起こるかも大体わかるし。そして今は学校にいるから、ぜんぜん違います」(Dさん)

そして、子ども全員が学校に通っている今は、かなり楽になったようである。

「まず、9時までにつれて行って、3時に迎えに行くので、その間の6時間いろいろできます。幼稚園の時はそうはいきませんでした。買い物に行って、そのあとすぐに迎えに行って、そして家でお昼って感じでした。下の子が6歳になった今、自分の時間を持つことができます。それから、5、6歳になれば、今本を読んでいるから、とか、洗濯の最中だから、あとでね、と言っても理解してもらえます。そえが2歳だったら無理でしょう。そういう意味で、身体的なケアという面で、手がかからなくなりました。今度は精神的な面ですね。12歳の子は、いつも、『どうしてだめなの、こうだったらどう?』と喋ってきます。小さな子どもだったら、さっさとトレーナーを来て、車にのって、と機械的にできたけれど、今度は、そうはいきません。」(Dさん)

Dさんの場合、日常生活面での現状を詳細に語り、日々の忙しさが感じられるが、いわゆる「育児ストレス」という風に捉えられているものはあるのだろうか。親とのコンタクトを仕事にしているJさんに、たずねてみた。

(育児に関わるストレスについてはどうですか。)

「もちろんあります。親から電話がかかってくる。たとえば、3歳半のこどもがいるのだけれど、寝かしつけるのに3時間もかかって、自分が寝不足になっているとか。あまりにつらいのでいろいろと試したけれどだめだった、どうしたらいいか、というような電話です。そこで、まず、一步下がって、何をやってみたのか、何をやると見込みがありそうなのかなどをよく話します。まだ試していない方法をおしえてあげ、話しをきくだけでも違います。また、参考資料なども教えてあげます。多くの親は、たくさんいい本があるにも関わらず、読んでないのです。そういうのを紹介したり、図書館にあるのを教えてあげたり。

何歳ではどうであるべき、というような本ではありません。子どものいいところをひきだすとか、そういうものです。学校でうまくいかない場合どうしたらいいとか。ニュージーランドの子どもは結構リラックスしていて、人を押しつけて成功しようとかそういう感じではありません。」(Jさん)

Jさん自身も、「息子が小さいとき、毎日ずっと子どもを家にいるのが苦痛で、仕事をしたいと思ったのを覚えています。6ヶ月くらいのときでした。そのとき、求人欄をみたりしました。でも仕事をさがすまではしませんでした。自分の求めているのは、他の親と知り合って話したいということだったとわかったのです」と語る。

やはり、子どもだけと家に閉じこもった状態でない方が、精神的にうまくいくようである。なんらかの形で、実質的にあるいは精神的に支えてくれる人や場が必要だといえる。次に、ニュージーランドの親たちが、どのようなコンテキストでそれを行っているのかを見ていく。

(3) 育児環境

他の親たちと、どのように知り合ったかについて、Gさんは次のように話す。

「普通、病院で出会ったり、プランケットナースを通して出会ったり、ロコミのこともあります。友達になった人が、『このプレイグループに行っているけれど、あなたもどうぞ』と誘ってくれます。そこでは、子どものことで何か問題があったりすると、相談したり、他の人はどう対処しているかなどを聞くことができました。自分だけが子どもと家にいるのではなく、他の大人と話すことができるのです。」(Gさん)

「交代で互いの家を訪問して、担当の人はお茶の用意などをします。あと、プレイセンターとして組織され、どこかのアクティビティ・センターでやったりしているのもあります。行きたくなかったら行かないし、時間などもフレキシブルでした。プレッシャーなどもなかったです。」(Gさん)

この「プレイグループ」と呼ばれる、親同士の付き合いと子ども同士の遊びを促進するグループを、インタビューした人皆が肯定的に捉えていた。孤立感や育児に関わるストレスや疑問、ずっと家にいることへの不満や悩みがあったとしても、プレイグループを通してのつきあいの中で、解決しているようであった。(注：プレイグループ：認可対象外の子ども達の早期教育を地域で行うために親たちが共同ベースで作る親のグループである。基準を満たしたグループは、早期教育開発 (ECD) より援助を受けることができる。また、それが発展して認可の保育所になる場合もある。)

Dさんは「(大変なときも) プレイグループがあったから、なんとかなったと思っています。子どもとちょっと離れる時がもてたし、友達もできたし。」

Nさんも同様に「プレイグループっていうのがあって、近所のお母さんたちと友達になって、週1度は何かしていたわ。」と言う。B氏も、「妻の育児の支えになっています」とプレイグループの貢献を受けている様子を語った。

Nさんは、子どもが大きくなってからも、教会を通して同様の機能を果たすグループを作っていた。「教会でも、ユースグループをやって、家にはいつも数人のティーンエイジャーがいたわ。」さんも、うちの息子と同じ位の年の男の子がいて、交代でお互いの家をたずねていました。そうやって助け合ってきたわ。1週間おきの金曜に好きなことができたから、とてもよかったです。」

どのようにプレイグループに加わって行ったのかについては、Jさんが語っている。「そのときのプランケットナースがとてもよく、私の近所の親とコンタクトをとってくれました。そして、他の母親も自分と同じような気持ちを持っていることがわかり、それでとても助かったのです。そのプレイグループに入りました。」

プレイグループは、家にいることの多い母親が主となっており、フルタイムで働く親たちには、フィットしないものであるようだ。また、男性の参加はほとんどなく、女性中心のものである。Jさんは「プレイグループはいいけれど、働く母親にはフィットしないわね。家にいる母親ならいいけれど」と語る。

グループの中での人間関係のもつれ、グループに溶け込めないで困る場合などはあるかという問いに、Jさんは次のように答えた。

「確かに、考えれば、あなたの子どもがうちの子を叩いたとか、そういうことで気まずくなる可能性もあるでしょう。私のはいろいろな人の混じったグループでした。歯医者とか、医者のうちもあったし。でも個人的には気にしませんでした。例えば、家の大きさとか持ち物などは、違っていたけれどあちらも気にしてなかったし。あなたも幸せ、わたしも幸せ、これがわたしの家、これはあなたの家でいろいろあっていいではないですか。」(Jさん)

人によって経験は異なるだろうが、少なくともインタビューした人に限っては、内部での面倒な人間関係について、ネガティブに語った人はいなかった。

上でみてきたプレイグループは、主にお互いの家を訪問し、話したりすることが主である。それを通して、友人となり、グループを離れてからも、育児の助け合いも行ってい

る。そこでできた友人との関係は、グループを離れてからも続く。例えば、Gさんは、「子どもが小さい頃は 例えば自分が病院に行くときなど、子どもを連れて行くか、近くに住んでいた仲のいいともだちに預けて行きました。よくお互いの子どもの面倒をみあっていました」と語る。

しかし、親が近くにいる場合は、実質的な支援を親から受けていることも多い。

「周りに家族がいたから、助かりました。まず、自分の母親です。15分離れたところにいたので楽でした」(Nさん)

「代休で学校の先生をした期間で、一番長いのは6週間でした。そのときは、たしか自分の両親が子どもの面倒を見てくれました。車で一時間くらいのところで、父が月曜日の朝迎えに来て、金曜日にうちが迎えに行きました。あと、家には義理の姉がいて、手伝ってくれました。それから夫の母もやってくれたと思います。友達にも手伝ってもらいました。」(Jさん)

「この仕事(デンタルナース)は、子どもの学校と同じ休みなのでたすかっています。でも2週間は重ならないときもあってそのときは、親に手伝ってもらいます。その点、自分はラッキーです。ある意味では、そのためにここに越してきたのです。」(Gさん)

しかしDさんの場合は、親から離れて住んでおり、また夫の親も働いていたので、まったく手伝ってもらえなかったとのことである。そこで、同年代の人達とネットワークを作り、面倒を見合った。買い物に行く間に子どもを頼んだりしたとのことである。

このように、少なくとも10年くらい前までは、親からの支援は不可欠なものとなっており、多くの親が、親に手伝ってもらいながら子育てをしてきたことがわかる。現在では、保育所などのフォーマルケアの利用が増えているが、それでも、281,000人の就学前の子どものうち、なんらかのサービスを利用している子どもが168,000人(60%)、そのうち、146,000人はフォーマルケア(87%)、親戚や家族などによるケアが多く占めるインフォーマルケアも45,000人(27%)と推定されている(保育調査、1998)。

インタビューした人のうち、プレイグループや親からの援助以外の方法を利用した経験のあるのはDさんだけで、1人目の子どもの時に友人の紹介してくれた人に預け、2人目ができてからは、その人に家にきてもらうようにし、3人目のときにも、やはり家にきてもらっていたとのことである。上の子どもが学校、次の子どもが幼稚園にいったからは、幼稚園の時間、週3回、午前中あずけた。子どもの面倒をみるナニー自身にも子どもがおり、自分の子どもも連れてきて、いっしょに面倒みていた。このアレンジメントをするにあたり、彼女はナニー協会にコンタクトし、相場をたずねてから、友人の紹介であった人と交渉して値段をきめたとのことである。

Dさんは、このフレキシビリティが必要だったとのこと、保育所では、時間がきまっており、連絡も何日か前にしなければならぬし、無理だったとのことである。

(4) 夫妻間の関係

次に、家事や育児をめぐる夫妻間の関係を見てみる。

① 夫の勤務時間と帰宅時間

Dさん、Jさん、Gさん、Nさんの夫の勤務時間をたずねると、皆夕方には帰宅している。

「夫は、7時半から8時の間に出て行って、4時半ごろ終わります。どんなに忙しくてもお茶の時間にはもどるってことにふたりで決めました。時によっては忙しいので、夕食後、子どもと過ごして、あとかたづけをしたあと、仕事にもどって夜の11時までやることもあります。」(Dさん)

「夫も教師で、勤務時間は8時から5時と普通でした。先生だったので、子どもの休みの時には休みになってよかったです。」(Jさん)

「(別れた)夫はエンジニアのようなもので、道具の製造に関わっています。会社につとめ、勤務時間は7:30から4:30で、5時には家に戻っていました。」(Gさん)

「夫は、夜もよく仕事に行っていたけれど、第一、自転車で15分のところだから、4時半ごろ、夕食前にはもどって、また夜仕事に行ったりしていた。だから、ぜんぜんさびしくなかった。いつもたくさん人がいて」(Nさん)

Oさんは、こう付け加える。

「価値観ってというか、全体的な社会がサポータータイプなのだと思います。みな仕事より家庭が大事なのです。父もそうでした。なんとしても家族が一番でした、父にとっては。子どもの誕生日だからといえば早く帰ってくるし。

私の今度入る会社でも、そんな感じです。休みは取るし。誕生日だから帰るってこともある。一生懸命働くけれど、弁護士や法律関係の仕事をしていて、家族のために帰るし、休みもたくさんとる。よく仕事をするけれど、大事なときには、そこ(家庭)にいてという感じ。」(Oさん)

このように、夫は5時くらいには戻っていて、家族との時間を過ごし、必要があれば職場に戻る生活をしている。そういう状況では、夫妻の家事分担はどうなっているのだろうか。

② 家事分担

インタビューした女性達は、これまで、大半の家事を自分が行ってきたことが伺える。夫たちは、芝刈りやメンテナンスなどのいわゆる「男性の作業」を多くやっており、また食事の後のかたづけ程度は、最低限していたようである。いくつかのカップルに共通して見られるのは、子どもが家事を手伝う年齢になると、夫の家事分担も増えていることである。

今は離婚しているが、Gさんが結婚していたときの状況をこう語る。

「私が食事の支度の95%をやり、彼は夜ちょっと子どもの面倒をみるくらいでした。掃除や洗濯も自分でやりました。芝刈りなど外のことは、私が家にいるから私がやることもありましたが大体彼でした。」彼女も、それを自分の役割と思い、彼も、女性の仕事だという考えだったので、表立った喧嘩や対立はなかったとのことである。

また、Nさんは、夫が修理や庭仕事はやっていたが、家事という家事をするのは、ほとんど自分だったとのことである。

「子ども達が小さいときには、わたしがほとんどやったけれど、今の時代はちがうと思う。働きに出ても、いわゆる家事は私がしていました。でも夫はペンキ塗り、ものの修理、庭の整備、それから、野菜も育てていたわ。だから家にも彼は忙しかったけれど、いわゆる家事っていうのではありませんでした。それから、娘達は5歳のときから家事の手伝いをしてきました。食事のしたく、買い物、それから洗濯などです。お皿を洗う、テーブルのセッティングなどは、もっと小さいときからやってきたわ。牛乳のビンを外に出す、といったことは5歳くらいからやっていたわ。」(Nさん)

また、Dさんは、「洗濯は(自分が)毎日しています。アイロンは、ほぼ毎日。掃除機は一日おき、トイレ、お風呂、床ふきなどは週に一回くらいです。(家事は)大体自分がやっていますが、子どもには家事を教えています。娘は週に一度はつくるし、息子も私の手伝いはできるようになりました。こうやって、ああやってというと、なんとかつくれます」と語る。

Dさんの家では、子どもの成長とともに、夫のやる分が増えた様子である。

「前は私がすべてやりました。・・・でも私の時間も細切れになっているので、子どもに手伝わせ、そうしたら夫も変わってきて、それ(家事をやること)が気に入ったようです。今は、夫も週末、月に数回は食事のしたくをします。それから、食事の片づけはいつもしています。掃除については、掃除機をかけるのは好きだけれど、はたきをかけるのはいやみたい。トイレ掃除もまあまあできるわ。洗濯は、やりたくないっていうより、知識がないの。(分類のしかたなど)教えられたことがないからしょうがない。でも洗ったものを置いておけば、どうすればいいかわかるから干しておいてくれます。でもどうやって分けて洗うかについては、私がやっています。」(Dさん)

Jさんの所も、最近になって、夫がよくやるようになった例である。

「夫は、8歳のときに父親が家を出てしまい、その後は、彼の母親がすべての面倒をみたような家です。母親が朝食をベッドに運んだり、洗濯をしたり、干してやったり、すべてやってもらっていたのです。だから、彼は結婚してから、家のなかの仕事もあるんだ、ということに慣れるまで時間がかかりました。でも彼は、わたしが教えたことを感謝しています。わたしが仕事のリストをつくり、やったらチェックしていくのです。今は、結構平等にやっていますね。特に土日には多くやってくれます。そして週に一度は夕食の支度もしてくれます。あと、掃除機をかけるのが好きでよくやっています。でもこの2、3年でしょうか、こんなにやるようになったのは。あと、娘も息子も週に1日は夕食を担当しますから。あと洗濯や他の家事もしてくれます。そのように育てたのです。」(Jさん)

そして、別の会話では、以前も、全くやらない、というのではなかった様子を語っている。「家事については、自分で気が付いてどンドンやるのではなく、でも、食後の後片付けはしていましたね。特に働き始めてからは、わたしだって外で仕事しているんだから、フェアじゃないということで、やるようになりました。そしてわたしが外で働くことも喜んでくれています。」(Jさん)

また、現在末子が1歳半で、2人の子どもを育てているB氏は、自分の経験や周りの観

察から、次のように語っている。「自分の印象では、ほとんどの男性が、掃除機をかけたり、野菜を洗って切ったり、食事の後片付けをしたり洗濯をしたりなどやっているよ」とのことである。

このように、インタビューした女性たちは、子どもが小さいころは、女性が主に家事を行い、男性が少し手伝う程度であったが、子どもが大きくなりつつある今では、その同じ夫妻の中での分担が変わってきている様子である。はじめのうちはやらなくても、だんだんとやるようになることは興味ぶかい。つまり、現在2, 30代ではなく、それよりも前の世代であっても、男性は、家事をすることに、それほど抵抗をしめしていないことの現れである。

もう一点興味深いことは、子どもがすでに10代を越えているDさん、Nさん、Jさんのところでは、共通して、子どもたちに家事を積極的にやらせていることである。Dさんが言うには、「子どもたちには小さいときからやらせているのは、家事だからっていうのではなく、家族としてやるのにいいことだからと思ったから。いっしょにいるのだから、いっしょにやって、皆が参加するのが望ましいと思います」というように、家事は、家族としてやるのが当然という考えも伺える。

では、子どもが家事を手伝うにあたり、男の子どもと女の子の負担は違うのだろうか。NさんとOさんの次の会話は、家族によっては与える仕事が男女で多少違うことを示している。

(家事の手伝いは、娘さんも息子さんも同じようにやるのですか?)

(Nさん)「息子はちょっと違っていたかも。でも皆がテーブルセッティング、食後のかたづけ、サラあらい、洗濯物のとりこみ、牛乳の取り込みなどをやったわ。息子は、その上にゴミだしや芝刈りをやっています。」

(Oさん)「でも彼はあまり料理はしないわ。」

(Nさん)「そうね。前、強制的にやらせていたけれど、同じ物ばかり作っているから。でもマシユーは、買い物もちゃんとできるし、今も時々はする。Oさんが買い物担当だったの。彼女がそのボスよ。」

(弟さんと別扱いにされたような感じは持っていますか。)

(Oさん)「特に別扱いにされたとは思わない。わたしは芝刈りもしたくないし、ゴミだしもいやだから。皆好きなことをやっているだけ、ってこともあるわ。」

(そうですか、料理が好きなのですか?)

(Oさん)「ええ、好きです。それに買い物も。」

(Nさん)「そうね、そう考えると、それぞれが選んでやっているわね。あなたはバスルームの掃除も好きでしょ。」

(Oさん)「ええ。」

(Nさん)「バスルームの掃除は彼女が選んでやっていたの。とてもうまいのよ。」

Dさんは「娘の方が早く覚えます。男の子の方はなんだかんだいうわ。でもいずれできるようになる。頼まれても娘はすぐにやってくれるから頼みやすい。息子については、こ

ちらも忍耐が必要です。誉めて誉めて、うまいうまい、って言ってやらせるの」と語る。

Nさんの場合は、男性、女性ということで作業に意識的に違いをつけているわけではなく、結果的にはかなりの部分がジェンダー規範によって分担されているといえよう。各自がその分担を個人的な嗜好と解釈していても、嗜好の大部分も規範に沿った行為をしてきた結果であると考えることができる。Dさんのような認識をもって努力していくことでそれに対抗することが可能となっている。

③ 子どもの世話の分担と父親の子どもと過ごす時間

次に、子どもの世話についてみる。現在2人の子育て中のB氏は、父親と母親の子どもへの関わりを、次のように観察している。

「子どもに関しては、1世代前とは違い、今の父親はとにかく一緒にやっています。まず、妊娠中は、出産前教室などがあるし、出産の場合は、パートナーがいれば、政府の規程で、一緒に行くことになっている。胎児の音をきいたり、どのようにしたらよい出産ができるかを学んだり、出産の現場ではどうしたらいいのかなども教えられる。そのように、始めから一緒にシェアしているので、子どもが生まれてからも当然つながりを感じます。」

(B氏)

「特に親などが周りにいない場合は、2人でやるしかないんです。友達で2人目を産んだところがあるけれど、彼は本当に大変でした。オムツを替えたり、自分達や子どもの服を洗ったり、買い物にいったり、それで、2年もたたないうちにもう一人生まれたから、今度は2人の子どもと奥さんとで、ほんとうに大変だった。しばらくは休みを取って家にいたみたいだけれど、今は、妻が家にいて、彼は仕事にもどっています。

これがもし彼女も働いているとしたら、もっと大変だったろう。妻の方が主導権を持ち、責任も重いけれど、父親の方も、できるかぎり手伝っているよ。それは、子どもに関わること以外の、食事のしたくとか、掃除とかも含んでいます。

母親が学校につれていって、父親が迎えにいったり、ひとりが水泳に連れて行き、もう一人をもう片方が別の活動に連れて行ったり。協力ですよ、母親だけの仕事ではない。でも自分の経験からは、子どもの世話をしたり、家事をするのも楽しいです。でも日本はそうでないのでしょうか？」

(それは、あなたが一般に比べてリベラルな考えをもっているからそうおっしゃるのでは?)

「確かに自分はリベラルです。しかし今住んでいるところに4年住んでいますが、近所の人を見ても同じようです。一人は、純粋な労働者階級の人で、車の整備士かなんかだと思う。もう一人は、コンピューターソフトかなんかの仕事をしていて、大学も出ています。でもこの二つの家族の間には、何の違いも見られない。どちらにも子どもがいますが、男性の関わり方は同じです。

東洋の社会と比べて、ジェンダーという意味では、ずいぶん違うと思います。厳格さや強度が違うんだ。妻達だって、夜会議があるのなんのって、夫に子どもを頼んで出掛けられるし、夜、友達と飲みに行きたいといえば、夫がそのときは子どもの面倒をみています。あと、幼稚園の会議だって、大抵土曜日の夜に設定されていて、11時過ぎまでやっている

ときもあります。妻は夜7時過ぎにでるから、自分が子どもに食事をあたえ、本を読んで、寝かせている。だれかのお別れパーティなんかもあるし、月に2, 3回はそういうことがあります。」(B氏)

そして、「今の世代は、家事をかなり同じくらい分担していると思う。父親は、子どもの送り迎え、食事のしたくの手伝い、掃除、オムツをかえるなどをしますが、日中家にいないときには、当然できませんが」と語っている。

B氏の認識がニュージーランドの「一般的な状況」を表しているかどうかは、今回の訪問からは判断することができないが、Nさんの観察では「最近男性も休業をとっている」という印象をもっていることや、Jさんの夫も、彼女が仕事をしていなかったときも、子どもの面倒はよくみていたこと、Dさんの夫も夕食後は子どもと過ごすということ、夫はほとんど家事をしなかったというGさんも「夜ちょっと子どもの面倒をみる」と言っているように、父親の子どもとの関わりは重視されているといえよう。

(5) 子どものコストという認識

当プロジェクトの関心テーマの一つである「子どものコスト」がどのように認識されているのかについて、たずねてみた。Dさんは、このように語る。

「(コストについては) 子どもを産む前にはまったく考えませんでした。そうですね、確かに、フルタイムで働かないことのコストは考えました。でも子ども自体のコストは、自然に金銭面で調節していくものです。コストのことを考えたのは、夫がビジネスに投資するときかな。彼は自分の収入の方が低かったから、仕事を変えよう。自分の事業をはじめなければ、家を買ったりできなかつたと思います。

夫の母親が一人目の孫だからとてもよろこんで、大きいものを買ってくれました。ベビーベッドとか、乳母車とか。あと、友達がいろいろなものを貸してくれたわ。だから高いとは思わなかつた。その下の子はお下がりによかつたし。どうせすぐに着られなくなるんだから。確かに子どもが大きくなると、いろいろな活動に参加するから、そのお金がかかります。試合にでたり、道具を買ったり。でもそんなに高くありません。年に一度は皆で旅行にも行きますし。」(Dさん)

Jさんも、やはりコストについては考えなかつたとのことである。

「経済的なコストなんて、考えなかつたことはなかつた。育てられるだろうかなんてそれほど深く考えなかつた。ただ、どういう風にお金を使うか、どこにかけるかを調整するだけです。・・・子どもにお金がかかるっていう話は、子どもがティーンになってから出てきたわ。産む前には考えない。他の親とも話さないし。いまになって、前よりお金がかかるね、と冗談交じりで言うくらい。」(Jさん)

同様に、Gさんも、「経済的なことは考えませんでした。少しは思ったのかもしれないけれど、だからやめるってことには全くならなかつた」と語った。Nさんも、コストは問題でなかつたことを語る。

しかし、今の世代は違うかもしれないのではないかと娘に持ちかけている。

「うちは、共稼ぎから、1人の収入になったけれど、それを受け入れて、それなりに幸せでした。大切なのは人間よ。外食したり、いい家具を買ったりなどしなかつたけど。車

も新しくしなかったし。最近の人は、物欲がつよいのかもしれないけれど。」(Nさん)

それに対して、娘のOさんは、次のように答える。

「でも、弁護士の友達だって、うちの母の時に比べても、特にお金のことをいうように思いません、子どもを持つことに関して。問題じゃないのよ。子どもを産んで欲しいとおもうのなら、経済的な支援をしてもしょうがないと思う。産む人は産むし、産まない人は産まないんです。お金とはあまり関係ないと思います。」(Oさん)

Oさんのように、近い将来、子どもを持つであろう若い女性も、特にコストを意識しておらず、また同世代の高学歴で、法律関係の職業についている友人達も、子どもについてのコストを意識していたと思えないようである。彼女が「産みたい人は産むし、産まない人は産まない」という考えを述べているのもおもしろい。

実際にかかるコストについても、子育てをしてきた女性たち、そして現在小さな子どもを育てているB氏は、それほどかからないと感じているようである。

「実際、それほどお金もかからなかったし、少なくとも、(コストは)話題になりません。ピアノ、Dさんス、ネットボール、コンピュータなどの稽古事やユースグループ、教会など、たくさんやってきたけど、あまりかからなかった。例えば、ピアノをやるとしたら、教えてくれる人の子どもの面倒を私がみるから、その間教えてもらうなどをしてきました。ニュージーランドでは、それなりの解決方法を考えるのです。ピアノをやりたいとしたら、近所で教えられる人を見つけて、お返しに何かするとか。日本はもっとフォーマルでしょ？」(Nさん)

「大体、あまりかからないよ。高校までは、ほとんど費用がかからないし、高くない。子どもを1, 2人欲しいのだったら、経済的なことは、ほとんどの人が考えないと思う。子どもがいると、キャリアの進みが遅いこともあるかもしれないから、そういう風に考えてうまいと思うこともありえるだろう。教育を受けて、専門職について、とやっていた家庭をつくるのを遅らせることはあるだろう。でも、子供にかかるコストはぜんぜん考えられていないと思う。

大学だって、子どもが自分でローンを借りていくんだし、でも前までは、そうでなくて、ほとんど無料だったそうです。この変化が20年後には何か影響をあたえるのかもしれないけど。子供たちは借金して大学にいて、そして家庭をつくるころ、それを返さなければならぬから、子供を持たないこともありえる。それが間接的に将来の出生率に影響するのかもしれない。でも今の時点では、大きな問題ではない。」(B氏)

Nさんの「今なら、産むとしたら、大学とかそこまで考えるかもしれない。前は大学が無料だったけれど、それがちょっとかわったから」との問いかけに対して、Oさんも、「でもわたしは子どもが16歳くらいまでは考えないと思うわ。アメリカとはちがうもの。子どもを産むときに、アメリカのように大学のコストまで考えることではないわ。」と答えている。

上記のB氏の1, 2人の子どもだったらコストについては考えない、との指摘は、「でも

3人目をどうしようと思ったときは、考えました。3人目を生まなかった理由の一部でもあるかもしれませんが。うちの寝室はちょっとちいさい」と語るJさんの状況に当てはまっている。2人目までは、「どこにお金をかけるかの調整」でよかったJさんも、3人目のときには、コストが頭をよぎった様子である。

また、コストの話しとの関わりで、環境全般についても語ってもらった。
(こうしてお話ししてみると、皆さん生活に余裕のある感じをうけますが。)

「そうね、家族生活は日本にくらべて、ずっとリラックスしていると思うわ。2回日本に行ったとき、あちらの校長先生の家に滞在しましたが、例えば、庭もきれいに整備され過ぎていて、妻が家にいてもすることがないのよ。さびしいだろうなって思いました。彼はいい方でしたが、朝の7時に家を出て、夜は10時過ぎないと帰ってこないし。子どもも、家も狭いから、中で走り回るわけにもいかないし。ここでは、外にでて、自転車を乗り回すことが敷地内のできるのよ。プールもあるし。ここは都市ですが、通勤は長くて20分くらいです。20分以上だったら、遠いという感覚です。日本だったら、それは短いでしょうね。」(Nさん)

「この辺(オークランド市)は海が近いから、家族でピクニックにも行きやすいです。西側はサーフィンにいいし、東側は安全でいいところがあります。いろんなことができます。仕事がおわるころ、友達に電話して、今夜開いていたら、あそこのビーチで会おうなんていうこともできるし。いつも家に帰って食事って言うのではなくて、外でバーベキューするのもいいわ。」(Dさん)

人口の研究者でもあるB氏も、物価や環境的な面をあげた。

「・・・食料品が安いし、だから極端に言えば、飢えるってことはない。こう言うてはいけないのですが、例え失業手当を受けているとしても、人生に何かを見出せるっていう感じですよ。小さな国で、たくさんのエンターテインメントはないけど、空間があつてちょっと行けば自然がある。いい景色、公園、ビーチなど、環境がいいと思います。あと天気もありますね。それほど寒くもならないし、暑くもならない。だから子どもにかかるコストなんかあまり考えないのかもしれない。」(B氏)

子どものコストについては、少なくともこれまでは、1, 2人についての産むか産まないかの考慮の際、経済的な面はほとんど認識されず、3人目以上については、場合によってはコストが考慮の対象となること、20代前半でいずれは子どもを産みたいと思っている層でも、コストが意識の上で大きく占めているわけではないこと、しかし、最近大学教育が無料でなくなったため、例えば20年後位には子どものコストが問題化する可能性もある、と、まとめることができよう。また、経済的なコストとして認識されない背景には、自然環境、社会環境のよさも作用している可能性もあろう。

(6) 結婚・子ども・子育てに関する意識

① 結婚と子ども

結婚や子どもを持つことについて、子どもの頃からあるいはある程度の年齢になってから考えていたかどうかについては、様々であった。「結婚したいと思わなかった。姉の状況

をみていて、退屈そうだったから」というDさんは、結婚しないことを前提に、歯科医になるつもりで、その資格をとるために別の大学に移るつもりだったとのことである。別の大学へ移るか、残るかの決断前に、今の夫と出会い、結婚することになった。

彼女は、子どもについても、ほとんど考えていなかったとのことである。

「そういうのは前もって考えるのではなく、関係の中で自然に発展させていくものです。私たちの場合、始めは考えていませんでした。6年くらい、そのままずっときました。でも何かちょっと変化が欲しくって、それで子どもを産んだのです。そして、一人目の子が病気だったから、もう子どもはいいと思いました。でもあるとき、もう1人持つてはいけないという決まりはないのだ、自由でいいのだ、と思いました。病気でない子どもというのは、どうなのだろうということも思っていて、2人目ができました。その次は、皆が、うちには男女ひとりずついるから、もう産まないだろうと思ったようですが、だからといって3人目を産んではいけないってことはないのだからと思い、人をちょっと驚かすつもりもあって3人目を産みました。」(Dさん)

「そうね、いい男性に出会ったら、結婚するだろうってことは受け入れていたわ。それと子どもも。でも「ああ、子どもが欲しいわ」って考えたことはない。結婚して3年くらいしたら、なんとなく、子どもを持つのにいい時期かもね、ってことになって。じゃ、そうしようって。でも生まれたら、これほどすばらしいものはないって思った。今、職場で若い女性ふたりと働いているけれど、両方とも子どもが欲しいって言っている。その点は私と違うわ。」(Nさん)

(ずっと、いつか母親になるんだとか考えていましたか。)

「若いときは思いませんでした。結婚して少しして、私は欲しくなりました。でも実際は結婚して数年してからでしたね。結婚して5年たつまでは、子どもはどうか、とまわりから聞かれました。でもその後は、あまり聞かれなくなりました。でもプレッシャーにはなりません。聞くのは主に彼のお母さんでした。なぜかわからないけれど、子どもをもつだろうと思っていた。何か母性的なものが自分の中にあるのだと思います。」(Gさん)

「17歳くらいのときから、早く結婚して子どもが欲しいと思いました。そのころ、グローリーボックスという習慣があつて、結婚したときのためのいろいろなものをしまっておく箱があつたの。友だちでもそんなことしていた人はほとんどいなかったけれど、私はやっていたわ。タオルとかシーツとか、テーブルクロスとか、用意して入れておいたのです。子どもは欲しかったです。結婚後、2年もしないうちに妊娠しました。大学を卒業して1年間教壇にたつて、そのあとでした。」(Jさん)

23歳でシングルのOさんは、「結婚については考えるわ。もしいい人がいたら、結婚すると思う」という。「何歳までに結婚したいとか、そういうのはありますか」、という質問には、「30までにはしたいと思うわ、でも間違っただけの人といるのだったら、シングルのほうがいいにきまっている」と答えた。

子どもを欲しいかどうかについては、次のように答えている。
「子どもは欲しいです。もし産めないとしたら、悲しいと思う。」
(何人くらいとか考えますか?)

「2, 3人かな。」

(友達はどうですか、子どものいる人もいますか?)

「います。まだ(家族生活が)はじまったばかりだから、いる人は、皆小さな子どもがいます。いても1, 2人。でも彼女たちがたくさん産むとは思わない。せいぜい2, 3人だと思います」(Oさん)

B氏は、人口問題の研究者の立場から、次のように述べている。

「価値観としては、パートナーはいるべきである、というのがあります。でも正式に結婚している関係である必要はない、という感じです。以前は、『同棲してもいいけれど、子どもを産むなら、ちゃんと結婚しなさい』という感じであった。今はそうでもなく、産む場合も結婚する必要はない。現に同棲は増えています。子どもを持つ前に、2, 3の同棲があつて当然という風になってきています。」(B氏)

しかし、同棲についての考えは、Nさんのころと同じような考えをもつ若者もいる。Nさんが、「同棲はいいとは思いません。自分たちのころは、あまり一般的ではありませんでした」というのに、娘のOさんは、「私もいいとは思わない。でも友達の多くは、やっている。長いこと婚約しているけど結婚しなかったりもしています」と言っている。

また、Jさんは、結婚に対するプレッシャーについての質問で、このように語っている。「教会などでは、誰がしていて誰がしてないかっていうようなことが意識されていると思う。でも直接聞いたりはしない。でも今は、結婚はあとにして、まずキャリアを設立させてからという考えが主だと思う。30代まで子どもを産まないかもしれないし。そういうのは受け入れられているわ。」

② 育児：保育所についての意識

子どもを育てることに関わることの中で、「保育所」というものに対する考え方が、ある種の強いものとして観察された。現在では、就学前の子どもの17%は保育所に行っているが(保育調査)、インタビューした人は、使わなくて済むのなら使いたくない、あまりよくないものである、という考えであった。

Jさんは、「個人的には、保育所に一日中子どもを入れておきたくないです。特にはじめの3年は発達段階にあるので、母親と父親が主な保育者であるべきだと考えます。他人との関係を作っていく過程で、まず情緒的に安定したものをつくるのが大事だと思うのです。週に5日間、朝8時から夕方5時まで保育所にいるのは理想的ではありません。表向きには確かに楽しそうかもしれないし、ちゃんと寝てちゃんと食べているのかもしれない。でもどうしても私はそれが正しいことだと思えないのです。保育所にいる子どもは、中ではそのルールに従って行動しています。でもその外で問題を起こすかもしれません。よく見ると、神経を集中させたり、きちんと人のいうことを聞いてその指示に従ったり、ということができていないのです。もっと親といたいものだから、食べるのを拒否したり、注意を

引こうとあれこれしたり。

しかし、私は、今こう言いましたが、経済的にどうしても働かなければならない人もいて、その場合、保育所を利用せざるをえません。どこでよいケアが受けられるのか、知らない人もいます。わたしの気持としては、子どもは自分を精一杯愛してくれる人といっしょにいるべきなのです。それを、だれかにお金を払って買うのは難しいと思います。

もし自分がどうしても保育所に子どもを入れなければならないとしたら、まずよく調べることです。本当にこの人は自分の子どもを愛してくれるのか、そしてできれば家族や友達に子どもをみてもらいたい。そのようにして、保育所にいる時間を少なくしたいです。そしてはたらくのも、私は、週3回くらいがよいです。」(Jさん)

「個人的にはオプションとしては考えません。私自身は子どもを保育所に預けたいとは思いません。でも、そうはいっても、私だって、例えば子どもが学校に入る前に離婚していて、働きに出なければならず、家族もそばにいなかったとしたら、考えざるを得なかったと思います。でもその場合、その保育所がちゃんとしたところかどうかをよく見極めて、評判なども確認して、ちゃんと資格があるかどうかともみると思います。実際は、それ以外の選択肢がない人にとっては、よいものなのだと思います。でも私は選ぶことができるのだったら入れないです。」(Gさん)

母親の影響もあるのか、Oさんもこのように答えている。

(あなた自身は、子どもを持ったとしたらどうしますか。)

「どうなるかわからないけれど、子どもは必ず親のいるところで育てたいです。それは、私かもしれないし、夫かもしれない。あるいはどちらかが2日でもう一人が3日とか。でも子どもは保育所には入れないわ。自分の母親のところに預けっぱなしにもしないわ。」

「フルタイムでは預けない。保育所も、おばあちゃんの所もフルタイムではいやです。自分の子どもは保育所で育てたくないのです。フルタイムで親のいる家が必要です。少なくともはじめの5年間はね。」(Oさん)

(Nさん、あなたもそう考えたのですか。)

「私の場合、保育所ということは、考えもしませんでした。」(Nさん)

これに対しOさんは、「私たちの世代は考えるわ。この世代は、夫妻とも働いているから。でも私は働きつづけたい。どうなるかわかりませんが」と付け加えた。

彼女達は、経済的にどうしても必要な場合は保育所を利用するのもしかたがないが、個人的には使いたくないということで一致している。しかし、早期教育という視点ではなく、女性が働くことの支援という点からの育児サービスの調査が1998年にはじめて行なわれたことをみても、Oさんのいうように、保育所も、多くのカップルにとっての合理的な選択肢の一つとなっている。

(7) まとめ

以上、6人との会話をもとにニュージーランドで実際に子育てをしてきた人たちの生活の様子を知るひとつの方法としてまとめてみた。今回話をした女性たちの子育ては、ほぼ

一段落した年齢であり、育児と仕事を並行して行ってきたグループではないため、かなり偏った結論ではあろうが、ニュージーランド社会をなすモザイクの一部として、いくつかの点を揚げるができる。

- ・ 女性は、出産を機に仕事をやめ、子どもがある時期になってからパートあるいはフルタイムで戻っている。
- ・ 子育ての一段落する3, 40代になってから、職を探すことをそれほど苦と思っていない
- ・ 家事は、女性が主となってやっているが、男性も後片付けや家の修理などはやっている、子どもが大きくなってからは、夫も週1回程度は食事のしたくをする、洗濯や掃除をしている。
- ・ 家族の一員として小さなころから子どもも家事を行っている。
- ・ 父親は、夕方には家に帰り、子どもとの時間を重視しており、世話も行って来たようだ。
- ・ 子どもの（経済的）コストは、ほとんど認識されていない。

子どもが生まれてからは女性が家にいて子どもの世話をし、子どもが大きくなってからまた仕事をする、仕事をする場合もパートタイムが多い、というパターンについては、「選択であった」と言う人が多くても、男女の職業上の地位や収入の違いは、その影響にもよるものである。しかし、話しを聞く限り、30代、40代になってからでも、専門を生かした職についていることは注目に値する。

注1：プランケット：

プランケットナースとは、Royal New Zealand Plunket Society から派遣され看護婦のことである。この組織は、女性と子どもの健康促進を目的として1907年に設立され、現在でも就学前の子どもの医療サービスを提供している主たる組織である。看護と健康教育、ボランティアのネットワークづくりを通して、幼児の安全やケアについて親に対し、教育および支援を行っている。1988年以來、女性評議会(National Council of Women)と提携している(Page, 1996)。

実際に組織で働いていたJさんは、「プランケットとは、出産後6週間目から、家を訪問してくれる看護婦のことです。5歳まで行きます。そのプログラムの中に、親が第一の先生である、というものがあります。最初の3年間、行きます。1ヶ月に一度、一時間くらいの訪問です。そのときに、母親、あるいは父親、祖父母など、一番ケアをしている人のところに、教材などを持っていきます。子どもの行動はどうかとか、脳を刺激したり、車のチャイルドシートの使いかたを教えたり、いつも座らせていないで、うつぶせにしてみたりすることを教えたりします。そして、なぜハイハイが大事かとか、筋肉の発達のためにどうしたらいいかということも話します」と話している。

5. 出生・結婚・労働動向（資料）

ここでは、ニュージーランドの出生、結婚、労働に関わる統計資料を紹介する。

（1）出生動向

「西側」の先進諸国では、19世紀の終わりごろから低下し、1930年代には、底をつき、置き換え水準までに下がった。第2次世界大戦後、ベビーブームとなり、1970年代初期には峠を越し、その後、これまで見られなかったような大きさを出生率が低下し、置き換え水準を下回っている。この傾向は、西洋の先進国に共通して見られ、ニュージーランドでも同じような傾向をたどってきた。しかし、いくつか異なる点もある。

ニュージーランドの出生率は、1896年の時点ですでにピーク水準より低くなり、その低下は、大恐慌の時まで続いた。パケハ（ヨーロッパ系）のベビーブームは長く続き、その出生率も他の国よりも高いのが特徴の1つである。1973年までつづき、出産コホートの大きさも、1961年と1971年の2回のモードがあり、大きくなった。第2次人口転換も、他国に比べ、始まりが遅いといえる。また、置換水準を下回ったものの、あまり低いことも特徴である。そして、1991年には、ベビーブリップというちょっとした上昇も見られ、置き換え水準にまで上昇した。

ニュージーランドの出生率の反復は、出産を遅らせていたカップルが、20代後半から30代始めにかけて、出産したこと、そしてこのコホート自体の大きさが大きくなったことによる。

マオリ人口は、全く異なるパターンを示してきた。タイなど、アジアの国の傾向に似ていると言われている。19世紀後半までに、出生率は非常に高かった（6.0）。そして、さらに1950年代にむけて上昇し、7.0までになった。その後、はじめは遅いスピードで、そして1970年代半ばからは、速いスピードでの低下が見られる。1970年代後半には、置換水準をやや上回る程度の水準となった。

1955年から1995年には、出生率は上昇し、そして下がり、またあがり、さがり、また上昇した後、現在は遅い速度で下がっている。この変化は、出産の遅らせに関わっていると分析されている。これによって、出産間隔におきている変化をもみ消しにしている。その結果、ニュージーランドの出生間隔は、北アメリカやヨーロッパ諸国に似てきてはいるが、その特徴は保っているといえる（Pool & Johnstone, 1999）。1998年のTFRはこれまでの最低値の1.91であったが、1999年には2.00に回復している。

女性省のアン・クラークによると、出生率についての社会の反応は、「少子化」よりも10代後半の妊娠が問題になっている。教育レベルが高い人は、出産を遅らせており、人口の再生産の問題は、時々取り上げられているが、特に重大な問題としては扱われていない。

しかし2, 30年後には、定年退職した人が若者よりも多くなるため、そのときに年金をどうやって払うのかが問題になるだろう、とのことである。一般の考え方としては、子どもを産みたければ生むし、そうでなければ産まない、という自由な考え方があると思う（アン・クラーク、女性省）。

図 II-5-1 から図 II-5-4 に合計特殊出生率を含むさまざまな出生率の値、図 II-5-5, 6 に年齢別出生率、図 II-5-7, 8 に有配偶・無配偶別の年齢別出生率を示した。これらは、1962

年へのデータに基づいている。

(2) 結婚・離婚の動向

結婚の状況も、変容を遂げてきた。1890年から第2次世界大戦にかけて、パケハ（ヨーロッパ系）については、極端な道りを経てきた。早婚・皆婚のパターンから、晩婚・非皆婚へのシフトは、イギリスに似ているものがある。再度ベビーブーム期に、早婚皆婚のパターンがみられ、その後晩婚型に戻ったのは、1970年後半になってからのことであった。同時に、結婚と同棲が混在する状態がみられるようになり、カップルパターンは、北欧やフランスに似てきている。1996年のセンサスでは、20～24歳の女性でパートナーのいる人の62%は同棲、男性では73%であった。

マオリの場合は、早くカップル関係になって早く出産することが一般的である。出生率が低下しはじめてからも、この傾向は続いている。

離婚に関してみると、「妊娠したから」、という理由で早く結婚したカップルに離婚が多い。また、分析によると、これらの女性は、家庭を去った父親を持つ傾向がある。1980年以前、親になった人の子どもでは、特に顕著であった (Pool & Johnstone, 1999)。

図 II-5-9 には、1961年以来の婚姻率、図 II-5-10 に初婚年齢の推移、図 II-5-11, 12 に未婚率の推移、および図 II-5-13 に年齢別結婚・同棲の回数、図 II-5-14 に年齢別関係地位の分布、図 II-5-15 に離婚率の推移を示した。

(3) 世帯構造

ひとり親家族は1976年から1991年にかけて増加したが、1990年代では、その増加の速さが遅くなっている。2人親家族の割合も、減ってきている。ほとんどが2人親家族あるいは親戚家族も含めた家族として住んでいる。孤立した一人親、というイメージは、統計的にはあまり見られない。多くの一人親家族は、複雑な関わりの中に位置しているといえる (Pool & Johnstone, 1999)。

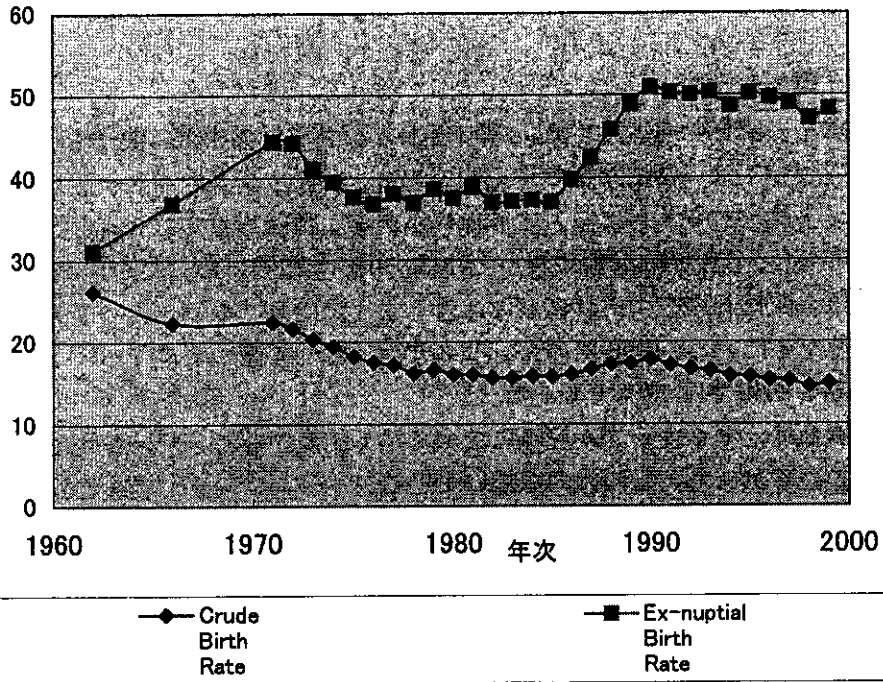
図 II-5-16 には、世帯タイプによる分布、図 II-5-17 にエスニシティ別の世帯タイプの分布を示した。

(4) 労働力率

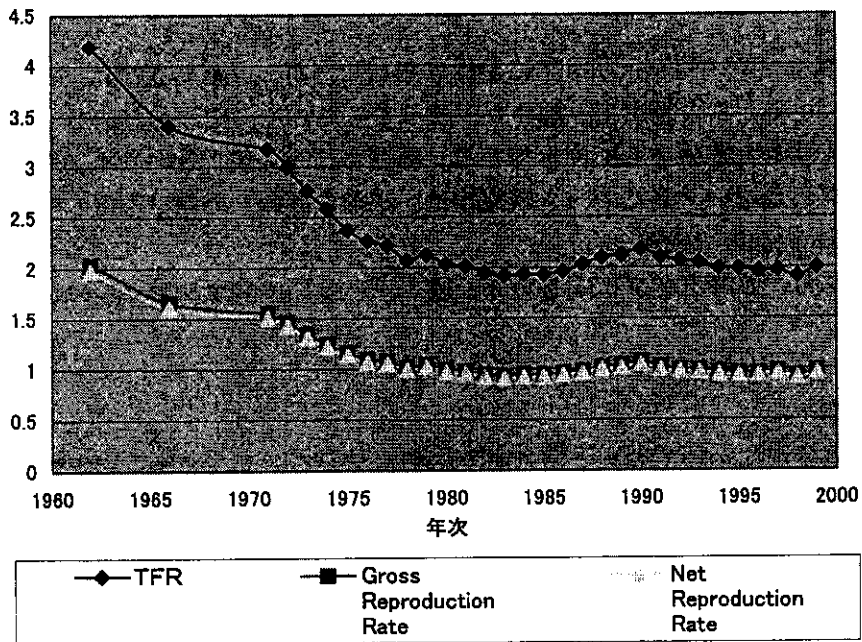
労働に関する状況については、上記ですでに触れている。ここでは、実際のデータを掲載する。

図 II-5-18, 19 に年齢別率・男女別の労働力率、表 II-5-13 に男女のフルタイムとパートタイムの割合、図 II-5-20, 21 に婚姻地位別の労働力率の推移、図 II-5-22 に非労働力人口の活動を示す。

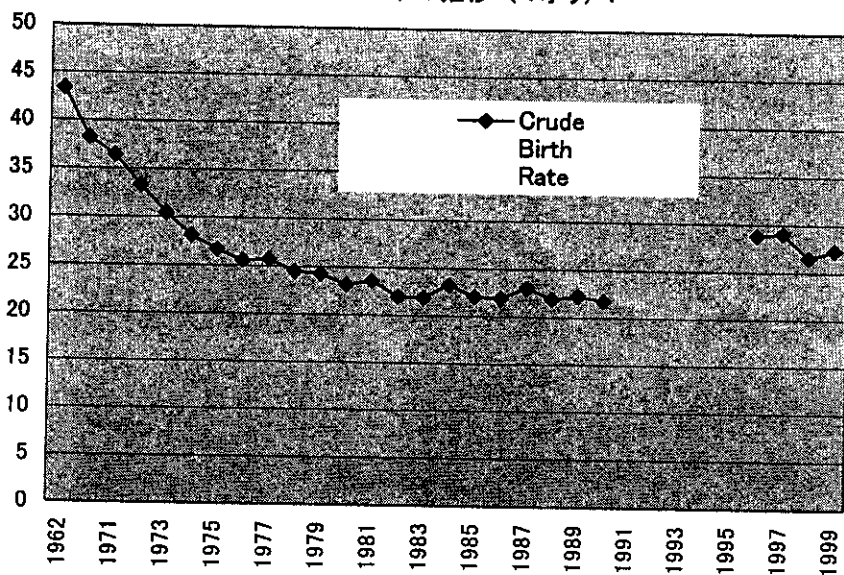
図II-5-1 出生率の推移(ヨーロッパ系)-1



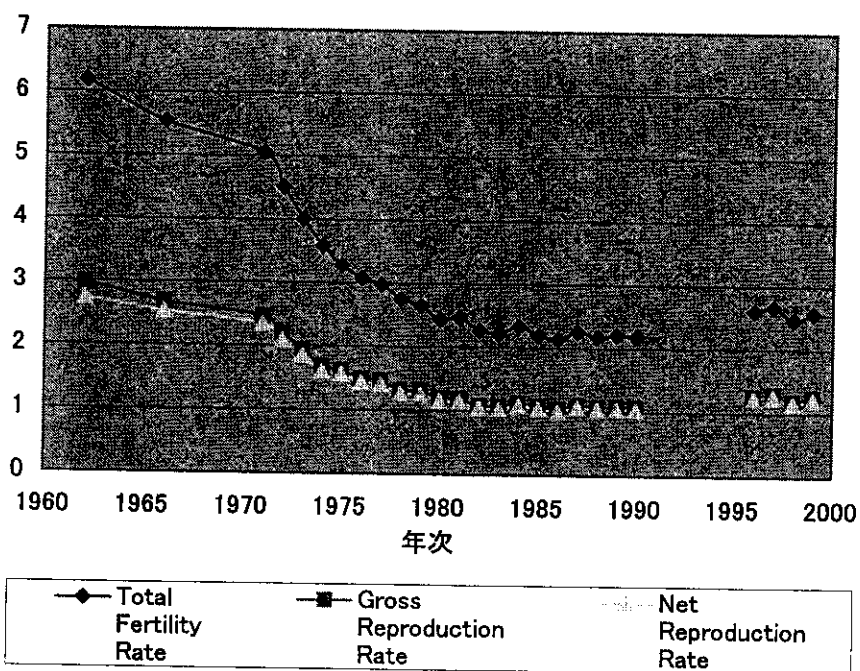
図II-5-2 出生率の推移(ヨーロッパ系)-2



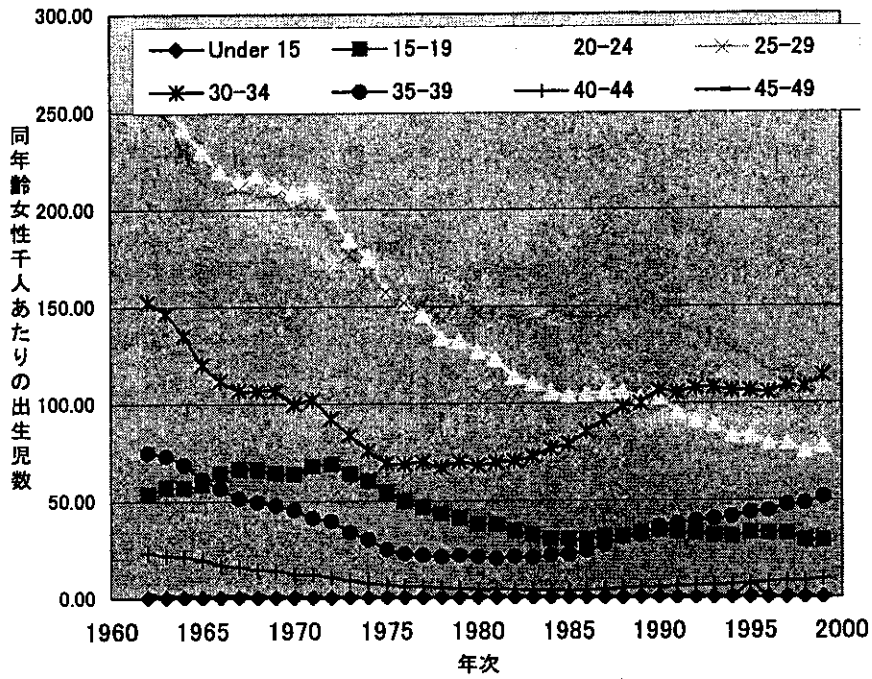
図II-5-3 出生率の推移 (マオリ)-1



図II-5-4 出生率の推移(マオリ)-1



図II-5-5 年齢別出生率:5歳階級別(ヨーロッパ系)



図II-5-6 年齢別出生率:5歳階級別(マオリ人口)

